

令和4年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

I 自己評価

岐阜県立東濃高等学校

学校番号

39

1 学校教育目標	知・徳・体の調和のとれた将来有為な人材の育成		
2 スクール・ポリシー	『育てたい生徒像』 グラデュエーション・ポリシー（GP）	『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー（CP）	『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー（AP）
	<ul style="list-style-type: none"> 自ら学び、自ら考え、判断し適切な行動ができる生徒 多様な価値観、個性、文化を認め、互いを尊重して行動できる生徒 変化する社会に適応して、地域に信頼され、貢献できる生徒 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の実態に合わせた主体的・対話的で深い学びを実現するためのカリキュラムの編成と授業実践 多様な価値観や個性を持つ生徒どうしの学校生活を通して、互いを尊重し互いに認めあいながら、自己肯定感を伸長することのできる人間性の育成 地域や外部と協働し、すべての特別活動、部活動や教科学習を通じて、地域の課題を発見・解決できる「主体的・対話的で深い学び」や「探究的学び」の推進 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣が身に付いており、ルール・マナーが守れる生徒 多様な価値観を認め合い、他者を尊重して主体的に学べる生徒
3 現状の分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒は概ね生活や学習等の取り組みに前向きであり、本校へ入学したことに満足している。 ○ 「あ・じ・み」（挨拶、時間、身だしなみ）の指導が定着してきており、モラルやマナーの向上にもつながっている。 ○ 基礎学力が定着していない生徒が少なくない。その一方、より深い学びを受けられる生徒も少なからずいる。さらに、得意不得意のアンバランスな生徒もおり、多様な学びのニーズに応えることでさらなる成長を期待できる。 ▲ 基本的な生活習慣や規範意識が確立していない生徒が比較的多く、コミュニケーション能力とソーシャルスキルの育成が必要である。 ▲ 外国につながる生徒が半数を超え、日本語能力及び学力の向上を含めた指導体制と公正な評価の研究・改善が必要である。 ▲ 自己肯定感が十分に育っていない生徒も多く、生徒の成長を認め、生徒が活躍する場づくりがより多く求められる。 		
4 学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒が主体となって学ぶ、わかる授業のさらなる推進 ・ 教員研修等の充実と生徒情報や指導についての共通理解の徹底 ・ 外国につながる生徒への進路指導・支援を含めたキャリア教育の充実 		
5 今年度の具体的な重点目標	◇生徒の可能性を見つけ、認めて伸ばす教育を展開することで「背伸び」をさせ、社会で通用する自立を育む。		

年 度 目 標			年 度 末 (途中) 評 価			
6 評価項目 領域・分野	7 重点目標の達成に必要な 具体的取組・方策	8 達成度の判断・判定基準 あるいは評価指標	9 取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	10 評価 A・B・C・D	11 成果と課題	12 総合 評価
教育課程 学習指導	①ユニバーサルデザインを活用 した誰にでも「分かる」授業	①生徒による授業評価	①年2回実施。おおむね良好。	B	○ICT機器の積極的な活 用。 ▲成績上位層の伸ばしこぼ しへの対策。生徒主体の 授業展開の工夫・研究。	B
	②基礎学力の定着と学力の伸長	②学びの基礎診断	②学年を経るにやや下降傾向。	C		
	③主体的で対話的な深い学び	③教員による授業評価	③年2回実施。意識がやや向上傾向。	B		
進路指導	①進路情報の提供や進路指導	①生徒対象アンケート	①生徒の76%が肯定的意見。	B	○幅広い進路実現の達成。 ▲進路未決定者への支援の 充実。	
	②生徒の良さや努力を認める	②学校評価アンケート	②保護者等の90%が肯定的意見。	A		
	③キャリア教育の充実	③各行事終了後のアンケート	③各行事終了後のアンケートで高い 評価。	B		
生徒指導	①基本的ルール・マナーの育成	①生徒対象アンケート	①生徒の81%が肯定的意見。	A	○指導への理解と高評価。 ▲個々の特性等の理解と情 報共有の徹底。	
	②規範意識の醸成	②学校関係者アンケート	②保護者等の93%が肯定的意見。	A		
	③教育相談の対応	③学校関係者アンケート	③保護者等の90%が肯定的意見。	A		

II 学校関係者評価

実施年月日：令和5年1月18日

- 多様な生徒が在籍する学校だけに、出口を見据えて多様な進路選択に係る情報を生徒と保護者に提供してもらいたい。
- 外国につながる生徒の多くは自分の意思で来日している訳ではなく、様々な事情の中で、文化的背景の違う国で思春期を迎えている。それだけに、ユニバーサルデザインの授業を学校で進めていることはよい。ただし、学力評価が日本語能力の評価とならないよう、評価規準の多様性が求められる。

13 来年度に向けての改善方策案

- 基礎学力の伸長を目指して、「分かる授業」「主体的で対話的な深い学びを体現する授業」の研究開発を継続するとともに、補習体制の整備、学習支援サービス（スタディーサプリ）の導入を進める。
- 入学から卒業後の進路実現まで、3年間の見通しをもったキャリア教育の構築について見直し改善する。
- 生徒がより相談しやすい体制を整えると同時に、生徒情報を職員間で共有できるようにする。